

Eureka X

六年制通信 No.10 令和4年6月10日(金)号

翻訳の問題

ちよつと前回の続きを…。ショウペンハウエルは「それぞれの民族、それぞれの時代の生んだ天才の著作だけを熟読すべし」、しかも二度読みなさいと言うのですね。彼は娯楽のための読書を否定しています。そんな「愚かな」本に割く時間は人生にはないと。私はショウペンハウエルのような哲学者ではないのでそうは思いません。楽しみのための読書、趣味の読書と言ってもいいでしょうが、それは大切です。私が君たちに紹介している本のほとんどは、私が純粋に楽しみのために読んだ本です。もちろん、いわゆる「ためになる」本、つまり少し難しいかもしれないけれど私が若い君たちに読んでほしいと願う本も入っていますが、基本的には読書は楽しく読めないと面白くないですよ。ただ、同時に、人類がこれまでに残してきた第一級の書物、それこそ膨大な量の歴史書や哲学書、例えばヘロドトスの『歴史』とかプラトンの著作などを読まずにいるのも勿体ないと思います。19世紀に活躍したイギリスの小説家ギッシングは「もし古典ギリシア語で書かれた書物がクセノポン（ソクラテスのお弟子さんの一人）の『アナバシス』しかなかったとしても、それを読むためにこの難解な言語を学ぶ価値がある」と言ったとされています。『アナバシス』とはそれほど魅力的な書物だというわけですね。幸いなことに私たちは言語的にも正しく流麗な日本語に翻訳された文庫本で読むことができます。岩波文庫ね。トライしてごらん。ちなみに日本は翻訳天国なのですよ。前にも書いたかもしれませんが、確かヴァレリーの全集は本家フランスよりも日本の方が先に出したはずですよ。自国の言葉で世界の古典が読めるという国はそうないはずですよ。ただし、その翻訳には功罪があります。

さて、ショウペンハウエルの言うことは一応理解できるのですが、ここで大きな問題があります。彼は間違いなく、難解だと言われているカントの『純粋理性批判』を読んだはずですが、もちろんドイツ語で書かれたものをそのまま読んですと理解したことでしょう。ところが私たちはそうはいきません。よほどドイツ語を勉強していない限り翻訳で読むことになります。そして翻訳の功罪の罪の方が哲学書には多いのです。つまり、この翻訳の哲学書が極めて読みづらいという問題があるわけです、私たち日本人には。先日ある本を読んでいて、同じことを考える人がいるのだと思いましたが、その著者はカントの言う「悟性」というのを『哲学事典』（1971年）で引いたらしいのです。すると「カントによれば、悟性は純粋概念の能力と呼ばれ、感性に与えられる素材を自己の形式（範疇）にしたがって整理し、対象を構成する自然界の立法者である」みたいなことが書いてあると。これを読んでわかる人間なら事典

など引かないだろうと。それで『純粹理性批判』の英語版を手にして「悟性」が何と訳してあるかを調べたそうです。これ、私も学生時代に同じことをしましたよ。事典を引くことはしませんでした。英語版は確認してみました。「嘘やん」と思わず声に出したことをよく覚えています。「悟性」(原語では **Verstand** となっているのですが)は **understanding** と訳されていたのです。じゃあ「理解」とか「理解力」とか訳したらいいではないか、どうして普段私たち日本人が使っている言葉に訳してくれないのか。非常に憤慨した記憶があります。それで、事典を引いたその人は悟性をこう解釈し直しています。悟性とは「カントによれば、人は物事を理解するときに、感覚器官に与えられた情報があるがままに受け取るのではなく、人間の側の理解枠組みに当てはめてしまう」ことであると。いかがですか。非常によくわかりますよね。もしも、事典にある日本語を読んですっとわかる人しかカントを読めないのだとすると、いかにカントがその時代の天才だったとしても、それこそこの種の本に費やす時間もったいないということになりませんか。ショウペンハウエルには悪いけど。

何が言いたいかという、実は私も君たちに、娯楽の読書だけではなくて、たとえ難しくても人類の知的財産と考えられるような哲学書には(大人になってからでいいから)触れてほしいと思っています。しかし、翻訳の日本語のせいで必要以上に難しく思えて読むのをやめてしまう場合があると思います。そんな時は、翻訳の上手な、少し読んでじっくりくる日本語で訳された本を探して下さい。ただし、内容が簡単なわけではないですからね、念のため。内容を理解するには緻密に時間をかけて、それこそショウペンハウエルのように熟読の再読をしなくてはなりませんよ。

今週のおすすめ

・筒井康隆 『短篇小説講義』 (岩波新書)

阿刀田高も短編小説の紹介や解説の本を何冊も書いています。面白いですよ。阿刀田さんは短編、筒井さんは短篇、どっちがいいのか、好みの問題ですかね。阿刀田さんも筒井さんもご自分が書かれるので、読み手としても一流だと思います。

今回の筒井さんの本は10冊ほどの(自分の作品以外は全て海外の作家の)短篇小説を取り上げています。その中で私の読んだことのあるお話は一篇だけでした。『悪魔の辞典』で有名なビアスの書いた「アウル・クリーク橋の一事件」です。アメリカの南北戦争の頃が時代背景ですが、確かこの作品で南軍が北軍のことをヤンキーと呼ぶんだと知ったのではなかったかな。ラストのどんでん返しが面白いのですが、筒井さんは短篇小説を書く際のテクニック上の問題をわかりやすく解説してくれて、大変勉強になりました。作家の視点とはそういうものかとね。ローソンの「爆弾犬」はどたばた短篇ですが、このあたり自分や開高健ならもっとしつこくねっとり描写するが星新一やローソンは上品に書く、そしてその方がよい、とか。なるほどと膝を打ちながら面白く読めます。もちろん気に入ったら実際に短篇集を探して読んでみるといいよ。さらに、阿刀田さんの短編をすすめる本なども探してごらん。

BGMは マイケル・ジャクソン の ベンのテーマ でした…。